

5月27日(日) 14:35~15:15 第二分科会:筑紫女学園大学スクワーヴァティーホール

---

## 司馬江漢作《天球図》の図像源泉について

神戸大学 橋本 寛子  
HASHIMOTO Hiroko

---

18世紀、長崎は鎖国下にありながら、日本で唯一外国船を受け入れる開港都市であった。長崎を通じて多くの和蘭文物が日本にもたらされ、同時に西洋の地理学や天文学も長崎に伝來した。司馬江漢は天明8年（1788）の長崎旅行を契機に和蘭通詞本木良永と知り合い、地動説をはじめとする地理天文の知識を教わった。江戸に戻った江漢は、その後一連の自然科学関連の銅版画作品を制作し、その中で最初の純粹な天文関連作品が寛政8年（1796）の《天球図》（神戸市立博物館）である。これは中国の伝統的な天文図の上に、西洋の星座絵を重ねて描いており、当時としては斬新な表現であった。本発表では、この作品の新たな図像源泉を明らかにしたい。

先行研究において江漢の《天球図》の図像は、イエズス会指導による中国最新の天文書『天經或問』中の図像と、日本に伝來した和蘭製の星座図像を取り入れたものであるとされてきた。さらに、初代幕府天文方渋川春海の実測による新たな日本の星座名も加えられ、当時としては、東西最先端の知識が詰め込まれた作品であったと言える。江漢が写した和蘭製の天球図は、《ブラウ世界図》（東京国立博物館）に描かれた両天球図を写したフレデリック・デ・ウィットの《天球図》（個人蔵）が原図と言われてきた。しかしこの作品は来歴等が明らかにされていない。

そこで、江漢が寛政5年（1793）に《地球全図》を制作した際、彼に助言をした馬道良との関係に注目する。馬道良は寛政3年（1791）幕命により、幕府所蔵ブラウの天地球儀補修を任され、一時天文方に勤務した人物である。馬道良による天地球儀補修の記録書『阿蘭陀天地両球修補製造記』の内容から、《天球十二宮象配賦二十八宿図説》（寛政7年）がその幅物として、現在国立国会図書館に所蔵されている事が判明した。これは黄道12宮の星座像が一直線上に描かれた作品であり、江漢の《天球図》に描かれた12宮像と28宿とを重ね合わせた図像様式が酷似していた。つまり、江漢同様に宇宙の外側から見て描く西洋の12宮像に合わせて、中国の28宿を反転させた作品だったのである。

また、馬道良の息子北山寒巖は、八代将軍吉宗の時代に伝來したと思われる和蘭製《フィッセル改訂ブラウ世界図》（東京国立博物館）の模写《和蘭考成万国地理全図照写》（寛政4~6年頃、天理大学付属天理図書館）を制作している。江漢の星座図像は、馬道良のものよりもデ・ウィットに近い事を考慮すると、同じくブラウの系譜である《フィッセル改訂》を模写した寒巖の影響力も大きかったのではないかと考えられる。

しかし、西洋の天球図という主題は、北山晋陽・寒巖父子（馬道良・馬孟熙）と江漢以降において制作例は見られない。それは江戸後期から幕末にかけて、急速に発展する蘭学と近代天文学の導入により、後世においてこの主題が省みられることが無かったからであると言えるだろう。